

特別展「松江城大解剖－城郭そして城下町－」

記念講演会「城下町遺跡の動物考古学－松江城下の食文化と動物との関わり－」にかえて
コラム（２）

－上級武家屋敷地と町屋の食卓と動物利用－

松江城下町では、天守に近い内山下^{うちさんげ}と呼ばれる外堀の中には家老などの上級から中級武士の屋敷が並び、その周りに町人・商人町や中級から下級武士の屋敷が配置されていたことを絵図から知ることができ、調査地点の性格と出土資料を対比して理解することができる。本コラムでは、上級武家屋敷地と町屋の台所事情や各地点での資源利用の特徴について紹介しよう。

ここでは、上級武士の屋敷地として家老屋敷があった松江歴史館地点と町屋にあたる地点の第 9・10 ブロック出土資料を比較してみたい。松江歴史館地点ではサルボウ、ヤマトシジミ、ハマグリ、サザエを主体に豊富な貝類に加え、マダイ、スズキ、タラなど魚類の種類も多く、キジ、カモ、ウなどの鳥類が目立つのも特徴で、イノシシ類やニホンジカなどの哺乳類も複数確認されている。一方、町屋では同様な種類が確認されるものの、鳥類の種類が少ないことや、松江歴史館地点では出土していないクロダイが確認されたことや、ウシの角が大量に出土している点などで差が認められる。豊富な鳥類は鷹狩りによる獲物であった可能性がある。また、クロダイは当時も日本海沿岸で多く漁獲できたと考えられるが、町屋から確認されたのみである。江戸時代の第一位の魚種はマダイで、その赤い色から縁起のよい魚とされ、黒い色をしたクロダイは上級武士には好まれなかったことを示しているといえる。さらに、町屋から出土したウシ角の多くは、先端が切断されたり周囲に刻み目が付けられており、表面の角鞘^{かくしやう}を剥ぎ取るために付けられた痕跡だと考えられる【写真 1・2】。ウシ資料としては、骨幹部が切断された大腿骨^{だいたいこつ}や脛骨^{けいこつ}も確認されている。また町屋からはアワビ



【写真 1】松江城下町遺跡から出土したイヌ、オットセイ、ウシなど



【写真 2】ウシ角に認められる加工痕

片も多く出土しており、同様に螺鈿細工の原材料を加工していたことがうかがえる。そのほかにも墨壺や錐、砥石などの道具も多く確認され、町屋にはこれらを使用する職人が住み、武士の生活に必要な道具を生産する工房があったことが読み取れる。

また、第3ブロックでオットセイの上腕骨が出土している点も興味深い。骨の一部が出土しているのみであることから、どのような姿で持ち込まれたのかは明らかにできないが、遠位部には解体痕と考えられる切創が認められる

【写真3】。オットセイは松前や奥州などの東北以北に生息するもので、慶長15年(1610)徳川家康が松前藩主に献上を命じたとされ、享保4年(1719)以降、松前藩から献上するのが恒例となったことが『松前志』に記されていることから、松江城下町においてはきわめて貴重なものであったに違いない。



【写真3】オットセイ上腕骨に認められる解体痕

さらに、アルファステイツ地点では複数のイヌが出土しており、その一部には切創を観察することができる。その他の調査地点でもわずかに確認されているが、複数個体がまとめて出土することは特別な意味を持つと推測される。イヌを多く飼っていた屋敷であった可能性、食肉用あるいはタカの餌にするために解体された可能性などが指摘できよう。

以上のように、出土遺物の比較によって松江城下町における屋敷地の暮らしぶりや食環境の違いを読み取ることができる。近年は全国各地で城下町遺跡の発掘調査が進み、動物遺存体資料も蓄積されてきた。江戸の町屋では、イワシ類やアジ・サバなどの小魚が多く認められるなどの報告もあり、ゴミ穴の土壌を目の細かい篩を用いた水洗選別作業ができれば、松江城下町遺跡においてもこれらが発見される可能性がある。今後の調査分析によって、城下町における動物資源利用の歴史はこれからも新たな発見があると期待される。

石丸 恵利子（広島大学総合博物館 研究員）